



Title	”一橋経済学”とマルクス経済学の関係
Author(s)	関, 恒義
Citation	一橋論叢, 91(4): 491-507
Issue Date	1984-04-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/11346
Right	

“一橋経済学”とマルクス経済学の関係

はじめに——“一橋経済学”とは何か

一橋大学は、商法講習所として発足してから今年で一〇九年目である。すでに一橋大学百年史の膨大な資料が整理、刊行され、一橋大学の学問史が体系化されつつある。この学問史を前提として、一橋経済学について語る事ができるようになった。

もとより、“一橋経済学”は学派ではない。一橋大学に、ケンブリッジ学派に匹敵するワンブリッジ学派が存在するわけではない。日本には欧米に見られるような学派は存在しない。後進資本主義国の日本では、ブルジョアジ（町人というべきか）が自力でみずからの思想をつくりだしたわけではなく、ブルジョア経済学は欧米からの

関 恒 義

移入学問として展開された。だが、後進性のゆえに、日本の経済学には、欧米には見られない独自性がある。最近では“ジャバン・アズ・ナンバーワン”という評価さえ与えられ、“後進性”が“先進性”に逆転したかのような状況さえ生まれている。一橋大学の経済学にも独自の学風があるわけで、この独自性を“一橋経済学”と特色づけることができる。

このような日本的な独自性として、一つの大学にさまざまな学説が、とりわけ近代経済学とマルクス経済学とが併存している点をあげることができる。筆者はかつてローザンヌ大学を訪れたとき、ローザンヌ学派一色でぬりつぶされているのをまのあたりにして、そこで学んでいる学生諸君に同情を禁じえなかったことがある。特定

の思想だけをおしつけられるよりも、さまざまな学説のなかから選択して、みずからの思想をきたえていくほうが、人間の成長にとっても、学問の発展にとっても、より創造的であることはいうまでもない。もとより、学問にとつては、現在までに築かれてきた成果を継承し、発展させることが必要であり、それだけに伝統が重要である。一橋大学の場合も、百年余におよぶ学問史を前提とした一步の前進が肝要なのである。

一橋大学は近代経済学の牙城を形成してきたのであるが、マルクス経済学の領域でも先進的な試みを展開している。しかも、この一橋のマルクス経済学そのものがすでに「一橋経済学」のもつ独自性を反映している。一橋の「マルクス経済学者」と称される人たちは、一橋が近代経済学の牙城であったことから、ほとんどが『近経とマル経の両刀使い』であり、近代経済学の批判をおしてマルクス経済学者になつてゐるわけで、これがまた、一橋のマルクス経済学の独自性をつくりだしている。筆者自身がそのような「マルクス経済学徒」であり、学生や院生にはつねにマル経と近経の双方を学ぶように強調している。マル経だけ、あるいは近経だけの知識しかも

たない経済学徒は学問的には「かたわ」である。このことを、私は「一橋経済学」をとおして体得したのである。本稿で問題にするのは、このような「一橋経済学」とマルクス経済学の関係である。

もとより、このような大問題をかぎられた小論で扱うことには限界がある。したがって、要約的な叙述にならざるをえないが、資本主義の発展過程をたどりながら、また、欧米の経済学と対比しながら検討することにしよう。

一 ブルジョア民主主義革命と資本主義への移行形態の関係

社会の発展過程は、特定の地域だけにあてはまる特殊性と、この特殊性のなかを貫く一般性ととの統一として行われる。資本主義の発展過程もそうである。資本主義の特殊性と一般性の関係にとつて、まず問題になるのは、ブルジョア民主主義革命と資本主義への移行形態の関係である。

ブルジョア民主主義革命は、封建的な身分的隷属を打破し、法のまえでの自由と平等を保障する革命である。

先進的なイギリスやフランスではこの革命をとおして資本主義へ移行する。この革命を準備した初期のブルジョア思想は進歩的であり、空想的な水準であるとはいえず、社会主義思想さえも生みだしている。だが、資本主義が私有財産制を前提とする階級社会であることに変わりはなく、労働力の自由な売買のもとに資本家が労働者から搾取する資本主義市場が成立する。資本主義の確立とともにブルジョア思想は保守化し、ブルジョア経済学も、進歩的な古典経済学から保守的な俗流経済学に代わる。

イギリスではブルジョアジーが封建勢力をとりこむ立憲君主制Ⅱブルジョア君主制が、フランスでは封建勢力を打倒して共和制が成立し、ともに植民地経営にのりだしていく。アメリカでは、イギリス植民地からの独立戦争がブルジョア民主主義革命に相当し、共和制をつくりだす。以上の三国が先進資本主義国であり、一八三〇年代までに資本主義を確立している。この当時においてもまだ封建制社会のドイツでは、先進国の自由貿易擁護のブルジョア経済学に対抗して、自国産業の保護・育成を主張する歴史学派が成立する。歴史学派は、かつての宗

主国イギリスに対抗して自国産業を強化しようとするアメリカにも影響を与え、歴史学派から出発して、アメリカ独自の制度学派がつくりだされる。

ドイツではブルジョア革命は徹底化せず、ブルジョアジーと封建勢力との妥協によりポナパルティズム君主制が成立する。この君主制は封建制末期に成立する絶対君主制とブルジョア君主制との中間形態である。ドイツよりも後進的なロシアでは、ブルジョア革命をとおしてではなく、絶対君主制Ⅱツァーリによる上からの変革をとおして資本主義へ移行する。ロシアよりも後進的な日本では、旧封建勢力の江戸幕府が倒されるとはいえず、新たに絶対君主制Ⅱ絶対主義的天皇制をつくりだして、上からの変革をとおして資本主義へ移行する。日本が資本主義への移行を開始する一八六〇—七〇年代は自由競争の資本主義が最高に発展する時期であり、この時期にドイツの産業資本も自立化し、ドイツでも歴史学派に代わって先進国なみのブルジョア経済学Ⅱ俗流経済学が主流を占めるようになる。

俗流経済学は、七〇年代初頭に現代ブルジョア経済学Ⅱ近代経済学の出発点となる限界効用学派Ⅱ新古典派と

して完成形態を与えられる。日本の場合、非力なブルジョアジーは新古典派までのブルジョア経済学をみずから力でつくりだすことができず、ブルジョアジー自体が天皇制権力に依存して成長するという状況のなかで、ブルジョア経済学は移入学問として展開されていく。一九世紀末以降の資本主義は独占資本主義・帝国主義に突入し、世界は植民地・従属国に分割され、後進地域はもはや資本主義国として自立することは不可能になる。日本は、資本主義ゆきの最終バスにまにあつたのである。

ところで、ブルジョアジーの保守化のなかで、民主主義運動はもはやブルジョアジーによってではなく、労働者階級を主軸として展開され、この労働運動を基盤としてマルクス主義が成立する。マルクス主義は、初期のブルジョア思想の進歩性を継承し、発展させることよつて成立する総合的な科学体系であり、初期のブルジョアジーがかかげた空想的社会主義とは異なつて、資本家階級の権力に代わる労働者階級の権力のもとに社会主義を實現していく科学的社会主義である。マルクス経済学は、俗流経済学を批判的に克服することによつて、古典経済学の労働価値論を剰余価値論として完成し、剰余価値論

とそれにもとづいて構築された再生産論を基軸として資本主義の発展過程を解明し、社会主義への移行の合法性をあきらかにする。

以上のように、資本主義への移行は、先進地域ではブルジョア民主主義革命によるとはいえ、後進地域になるほどこの革命が不徹底化して封建勢力の主導性が強まり、その庇護のもとにブルジョアジーが育成されるというのが、そして、帝国主義のもとでは、後進地域はもはや資本主義国として自立することが不可能になるといふのが、一般的な傾向であり、加えて、資本主義・帝国主義では、民主主義運動は労働者階級を主軸として展開され、社会主義の實現にむかつて推進されていく。

二 ブルジョア学派の諸形態と日本的・半封建的な接合形態

ブルジョア思想・経済学は、欧米ではブルジョアジーの自立を反映して、それぞれの国の資本主義的發展に照応する学派を形成したが、日本ではブルジョアジーが自立する力をもつていなかったことを反映して、欧米流の学派をもつことができず、支配層主流の思想は天皇主義

と移入されたブルジョア思想との接合という形態をとる。

新古典派は、それぞれの地域の大学を中心に、イギリスのケンブリッジ学派、フランスやイタリアを含む南欧のローザンヌ学派、ドイツを含む中欧のオーストリア学派（ウィーン大学）、北欧学派（ストックホルム大学）として形成される。これらのうち、ケンブリッジ学派が新古典派の主流となる。これは、イギリスが最初に成立した資本主義国として最大・最強であるだけでなく、労働運動に妥協するブルジョア改良主義を包摂していたことによるものである。このブルジョア改良主義と連動するフェビアン主義¹¹社会改良主義が労働運動のなかに浸透する。

社会改良主義は労働運動のなかに流れこんでくる小ブルジョアジーを基盤として成立する。ドイツやフランスなどの大陸側の社会改良主義は、イギリスのようにブルジョア改良主義と連動するのではなく、独自の源泉と性格をとおして形成される。オーストリア学派やローザンヌ学派は、これらの地域でマルクス主義や社会改良主義の運動が強力であったことを反映して、反マルクス主義・反改良主義の傾向が強く、ブルジョア改良主義の余裕を

もつことができず、したがって新古典派の主流となることはできなかった。

日本では、上からの変革であるとはいえ、資本主義への移行のなかでブルジョア民主主義運動が展開されはじめる。一八七三年に森有礼の発起により、福沢諭吉や加藤弘之などが参加する明六社が結成されて、ブルジョア民主主義思想による啓蒙活動が推進される。七四年に日本最初の政党¹²愛国公党が結成され、八一年に人民主権を主張する自由党（総裁板垣退助）と立憲君主制を主張する改進黨（総裁大隈重信）が結成される。このようなブルジョア民主主義運動と結びついて私学が形成される。福沢諭吉は一八五九年に開設した私塾を六八年に慶応義塾と改称し、大隈重信は八二年に東京専門学校（早稲田大学の前身）を設立する。とくに慶応は私学系のブルジョア経済学の牙城となる。

だが、自由民権運動は八九年の大日本帝国憲法の制定とともに終息する。日本の資本主義移行期は日本へも植民地化の波がおしよせる帝国主義の成立期であり、日本支配層の目標は、先発帝国主義に対抗する富国強兵の国づくりであった。天皇の不可侵性と統治権をうたい、天

皇を補強する貴族院の封建的な特権を明示し、人権の規定をほとんど含まない帝国憲法のもとで、日本は、きわめて不完全な議會をもつ封建的な権力癒着型資本主義として成立していく。非力な日本のブルジョアジーは、民主主義運動を指導する力をもちあわせていなかったのである。

日本の支配階級の思想の主軸は神道国教主義を基調とする天皇主義であり、ブルジョア思想・経済学の移入は、天皇主義と両立し、これを補強する形で行われる。一八七七年に、江戸幕府の学問所であった開成学校を母体として東京大学（八六年に帝国大学と改称）が設立され、この帝大法学部（当時は法科大学）が主として天皇制官僚を育成する役割をになった。帝大法学部の教授を中心として、天皇制政府の援助をうけて八七年に日本最初の学会「国家学会」が設立され、この学会が伝統的な日本の封建思想と欧米から移入されたブルジョア思想・経済学との結合をとおして天皇制イデオロギーづくりを準備することになる。資本主義確立期には主としてドイツ歴史学派が移入され、歴史学派を中軸として一八九六年に社会政策学会が結成される。

社会政策学会が一九〇〇年に発表した趣意書は、当時の日本ブルジョア思想界の状況を端的に示している。いわく、「余輩は放任主義に反対す、何となれば極端な利己心の発動と制限なき自由競争とは貧富の懸隔を甚だしくすればなり、余輩は又社会主義に反対す、何となれば現在の経済組織を破壊し、資本家の絶滅を図るは国運の進歩に害あればなり、余輩の主義とするところは現在の私有的経済組織を維持し、其範圍内に於て個人の活動と国家の権力とに依て階級の軋轢を防ぎ、社会の調和を期するにあり」と。つまり、歴史学派の立場から、ブルジョア自由主義や社会主義にたいする防波堤になろうとするわけで、先発帝国主義に対抗して帝国主義的自立をめざす天皇制政府には、格好な援護射撃であった。事実、この学会の主要メンバーを含む帝大の七教授は、一九〇三年に政府に意見書を提出し、積極的に日露戦争を進行している。

三 権力癒着型資本主義内での「一橋経済学」の苦難の出現

日本の資本主義確立期には富国強兵の国づくりの主眼

がおかれる結果、全体として商業・経済思想は軽視され、帝大には経済の専門学部はもうけられなかった。だが、経済力の強化は富国強兵の絶対的な条件である。権力癒着型資本主義にとって、商業・経済思想は権力への奉仕機能をもつものとして位置づけられなければならず、そのかぎりでは、この分野を権力外の私学系だけにまかせておくわけにはいかなかった。

明六社の発起人であり、米国駐在の初代外交官として国際的視野をもつ森有礼は、実業界の実力者、渋沢栄一（第一銀行頭取）の協力をえて、一八七五年に一橋大学の前身である私立の商法講習所を設立したが、この商法講習所は、八四年に東京商業学校（農商務省所轄、八五年から文部省所轄）へ、八七年に高等商業学校（一九〇二年に東京高等商業学校）へ発展する。こうして一橋は、日本最初の官学系の商業・経済教育の専門学校として発足する。だが、一橋は、帝大系の官学とは異なり、東京商法会議所（七八年設立、八三年に東京商工会に発展）から選出された商議員が管理する半官・半私的な形態をとる。

商法講習所の初代所長で、高商の校長でもあった矢野

二郎の教育方針は、「飽くまで前垂式商業の技術的方面に熟練した学生、人に使われる人間を養成すること」という、支配層への商業的奉仕者の養成であった。このような奉仕的な「前垂派、実学派」にたいして、実業人の地位の向上とそれにふさわしい高度の学術研究への改革を志向する「学術派、改革派」が台頭し、両者の葛藤のなかで、“一橋経済学”ははじめから苦悩の歴史を歩むことになる。権力癒着型資本主義のなかで、ブルジョアジーがいかに成長していくか、これに照応するブルジョア経済学がいかに発達していくか、この発達史が“一橋経済学”史をいろどることになる。ここに“一橋経済学”の第一の特色がある。

日本の支配階級のなかでのブルジョアジーの地位は相対的に低く、それだけに、みずからの地位の向上のためにも、資本主義経済の発展とそれに結びつく一橋の発展にたいするブルジョアジーの期待は大きかった。一八九七―八年の高商の商議員は、渋沢栄一、益田孝（三井物産合名会社専務理事）、園田孝吉（日本郵船株式会社取締役）、小野義直（日本鉄道会社社長）、荘田平五郎（三菱合資会社取締役）、阿部泰蔵（明治生命会社社長）、和

田垣謙三（東京帝国大学教授）、近藤廉平（日本郵船株式会社社長）と、ほとんどが実業界代表であり、かれらが一橋の育成にいかにか力を注いだかをうかがいしるることができる。

半封建的な天皇制権力のなかでの地位の向上は華族に列せられることであつた。一九〇〇年の渋沢栄一の男爵授与は実業家の地位向上を示すもので、渋沢は、一橋同窓会の叙爵祝賀会の挨拶で、「栄一一身の為でなく日本の商工業の為である」、「此商業学校をして大学の位置にまで進めたい」とのべている。資本主義経済の発達がブルジョアジーの地位向上と一橋の発展をもたらすわけで、これを反映して、一八九七年に高商内に専攻部がもうけられ、九九年にその修業年限が二年に延長される。この専攻部は実質的な大学に相当し、一橋は、「前垂派」から「學術派」に発展し、官学系のブルジョア経済学の牙城となつていく。

高商に専攻部がもうけられたころから、経済学の殿堂という自覚が生まれる。一八九八年に帝大の一書記官が校長に任命されたことにたいして、学生は、帝大と対等という対抗意識のもとに卒業試験をボイコットして抵抗

し、校長を変えることに成功する。高商専攻部は、実業界の指導者（キャプテン・オブ・インダストリー）の養成だけではなく、地方の高商の経済学教師養成の学府となり、多数の経済学者を輩出していく。多くの留学生在が派遣され、欧米の経済学の導入にもとづく「一橋経済学」が形成されはじめる。これを主導したのが福田徳三である。

福田はドイツ歴史学派から出発した。歴史学派ブレンタノとの共著『労働経済論』（一八九八年）が示すように、歴史学派の代表者の一人であるが、同時に、「社会主義研究の棗」（『経済学全集』第五集下、一九〇六年）でマルクス研究の学界展望を与えているように、マルクス研究の分野でも先駆者となつている。もとより福田は、河上・福田論争からあきらかなようにマルクス批判者である。論争相手の河上肇は帝大系のマルクス経済学者で、マルクス主義の動きは帝大のほうがはやい。これは、帝大が天皇制権力体制内に強く包摂されていることにたいする科学的な批判は、マルクス主義の立場から全面的に可能になるからである。だが、福田もたんなる批判者ではない。ブルジョア経済学の牙城の代表者として、一貫

してブルジョア改良主義を追求し続け、『経済学講義』(一九〇九年)ではケンブリッジ学派の創始者マーシャルの研究に集中し、『統制経済学講義』(一九一三年)では、このケンブリッジ学派派流の改良主義のなかにマルクスの再生産論を包摂しようとしている。

四 “一橋経済学”の形成に果した福田

徳三の決定的役割

福田徳三は、学問の創始期に共通にみられる総合的な指導者であり、『一橋経済学』の形成に決定的な役割を果している。福田の見解のなかに『一橋経済学』初期の性格が集約されている。

一橋大学創立百年記念『一橋大学学問史』においても、「理論・政策・歴史・統計——一橋経済学のあらゆる源流が福田徳三博士に求められる」(美濃口武雄)、「斯学(近代経済学)において演じた役割は、決定的なもの」(荒憲治郎)、「一橋のみならず、日本におけるマルクス主義・マルクス経済学研究の創設に大きな貢献」(種瀬茂)、「ソ連邦について、本学で最初にまとまった研究を公けにした」(宮鍋幟)、「社会学的伝統の確立に貢献」

(古賀英三郎)、「社会政策論の伝統形成の主役」(大陽寺順一)、「わが国の歴史学は、教授を通じて、いわば歴史を理論的に把握する方法をはじめて獲得」(山田欣吾)などと示されている。福田が活躍した時期は大きな激動期であり、経済学も転換期をむかえていた。

新古典派は、資本主義の自由競争市場がすべての人に効用の極大をもたらす調和的均衡を保証するとみなす自由競争資本主義擁護論として成立した。その理論的支柱は効用価値論と生産三要素説と均衡理論である。帝國主義のもとで、新古典派は独占資本擁護の方向へ修正される。ローザンヌ学派やオーストリア学派の修正の仕方、効用価値論の追放や生産四要素説の採用による反動化の方向である。効用価値論の追放は、ブルジョア個人主義にもとづいて各個人の効用を価値の源泉とみなす従来の新古典派の原則的な立場を否定することを、また生産四要素説は、従来の労働―賃金、資本―利子、土地―地代の三要素説に経営―利潤を追加することによって独占利潤を肯定することを意味し、こうして両学派は、独占資本に奉仕する均衡装置と化していく。とくにローザンヌ学派は形式的・技術的な均衡装置を数理経済学として体

系化する。

新古典派の基本的な欠陥は資本主義の矛盾を抹消する点である。この矛盾は、自由競争の資本主義のもとでは重大化するにいたらなかったとはいえ、帝国主義のもとで最高度に激化する。ローザンヌ学派やオーストリア学派は、この矛盾激化をことさらに無視することによって反動化を強めるが、ケンブリッジ学派や北欧学派、制度学派は、矛盾激化に改良主義的に対処するために、独占禁止法の制定や福祉政策の推進などをおして厚生経済学や福祉国家論を開拓していく。こうして新古典派は、反動化と改良主義の二大潮流に分化する。

帝国主義の時代には、先発帝国主義は、国内の矛盾を植民地・従属国にはきだす余裕があることから、労働者と妥協しうる改良主義的な余地をもつが、後発帝国主義は、この余裕や余地をもたないために植民地奪取の侵略性を強化する。帝国主義国として最も後発的なロシアと日本では、経済力に比して過大な軍事力をもとうとするために、封建性に加えて軍事性の強い軍封帝国主義が成立する。ロシアでは、マルクス主義はマルクス・レーニン主義へ発展し、ツァーリ支配の軍封帝国主義にたいす

る労働者階級主導のブルジョア民主主義革命から社会主義革命へという路線をかかげる。帝国主義諸国の矛盾が集中的に爆発する第一次世界大戦のなかで、矛盾の集中点としての弱い環がロシアに形成され、マルクス・レーニン主義の革命路線が成功して一国社会主義ソ連が成立し、資本主義は実際に崩壊を開始する全般的危機時代に突入する。

この全般的危機の日本的反映として、民主主義運動がふたたび高揚する大正デモクラシーの時代が到来する。大正デモクラシーは労働運動・農民運動を基盤とする本格的な民主主義運動であり、一橋関係者はこの運動に改良主義の見地から参加する。渋沢栄一の援助のもとに一九一二年に鈴木文治によって労使協調の友愛会（のちに大日本労働組合総同盟）が組織されている。福田徳三は、一八年に民本主義の吉野作造らとともに黎明会を組織して、社会改良主義的活動を強め、『社会運動と労銀制度』（一九二二年）や『社会政策と階級闘争』（同年）などをおして、半封建的・前近代的な労働問題の民主化・近代化を提起し、生存権を基軸とする社会政策原理を説明している。

日本のブルジョア思想界の主流は、マルクス主義はいうまでもなく、改良主義をも天皇制に反する思想として排除するが、福田は、これに抵抗してブルジョア改良主義を堅持し、この道の日本初期の泰斗となる。一橋には森有礼らしいの伝統として国際社会での活躍という問題がある。国内での地位向上には封建的権力体制内へのくいこみが必要であるが、最もきびしく、最も近代的な競争を強いられる実業人の国際舞台では、封建的特権などはなんの「ねうち」もないのである。むしろ権力癒着型資本主義はブルジョア改良主義的に改造されなければならぬ。福田がブルジョア改良主義の伝統をつくりあげたところに、『一橋経済学』の第二の特色がある。この伝統が一橋リベラリズムを培う温床となり、籠城事件などの反権力闘争のエネルギーとなり、第二次大戦後には、学長選挙に職員と学生が参加する規定をつくりだす民主的基盤となる。

五 『一橋経済学』の展開として登場するマルクス経済学

大正デモクラシーは日本でも資本主義経済が完全に開

花したことのあかしであり、経済力の強化を反映して、一九一八年に日本ではじめての政党内閣が出現し、一九二〇年に東京帝大に経済学部、二〇年に京都帝大（一八九八年設立）に経済学部がもうけられ、一橋が東京商科大学に昇格し、続いて神戸高商が商大に昇格し、経済学がようやく自立する。

この経済学の自立はまた、マルクス経済学の確立を意味し、帝大系の経済学部にはマルクス経済学者担当の講座が実現する。たんにマルクス主義の解説だけではなく、マルクス主義の立場から日本資本主義を科学的に解明する試みが、たとえば野呂栄太郎『日本資本主義発達史』（三〇年）や大塚・野呂・平野・山田編『日本資本主義発達史講座』（三二—三三年）などをとおして展開される。『講座』の編者である大塚金之助は、一橋の最初のマルクス経済学者であるが、『講座』では「経済思想史」（第二部所収）を担当し、ブルジョア経済学を批判して、「マルクスは、ドイツについて、経済学はドイツから見ても、『外国科学』であったと言った。このことは日本にもあてはまるであらうか。私が見るところ、日本にとっては、経済学は『外国科学』ではなかった。それは外国俗流、

「済学であつた」とのべている。

このように、近代経済学を批判してマルクス経済学者になるといふ、「マル経と近経の両刀使い」といふ一橋のマルクス経済学の伝統は、大塚によつてつくられたものである。ブルジョア経済学の牙城のなかで、大塚は、福田の指導のもとにブルジョア経済学の研究者としての道を歩みはじめ、マーシャル『経済学原理』を翻訳（二五—二六年）し、数理経済学の研究にもとり組んでいく。しかし、ドイツ留学（一九—二二年）で、当時の革命的情勢とマルクス主義の高場に接して、マルクス主義者となつて帰国した。この変化について、指導教官をはじめだれもが問題にしなかつた。二七年からは、福田と中山伊知郎が第一原論（近代経済学）、大塚が第二原論（マルクス経済学）の平行講義を開講し、むしろ第二原論担当者、マルクス経済学者として、大塚をはっきりと位置づけている。

このような自由な雰囲気、講座があつて人があるのではなく、人があつて講座があるという状況のなかで、「一橋経済学」は発展していく。ここに第三の特色がある。「一橋経済学」の展開そのものがマルクス経済学を

つくりだしているのである。この平和的につくりだされた第二原論も、大塚が治安維持法（二五年公布）により大学を追放されることによつて消滅する。社会主義者を極刑をもつて弾圧する治安維持法は、政党内閣のもとでつくられるが、政党内閣の登場は、権力体制内での地位を高めてきた独占資本グループと天皇制との抱合を示すものであつた。

ところで、マルクス主義による日本資本主義の分析と結びついて、日本共産党（二二年創設）の綱領『三二年テーゼ』が採用され、絶対主義的天皇制支配の軍封帝國主義にたいするブルジョア民主主義革命から社会主義革命へという路線をかかげる。この路線はロシア革命の路線と同質であり、ロシアは社会主義ゆきの始発バスに乗つたが、日本はそうならなかつた。その原因について、ファシズム化する凶暴な弾圧体制にたいする反ファシズム統一戦線のような広範な民主統一戦線が欠落していたことがあげられるが、さらに、長期にわたるツァーリ体制の矛盾がとりわけ深刻化していた下り坂の軍封帝國主義と、新たに絶対主義的天皇制を中軸とする強力な権力癒着型資本主義をつくりだした上り坂の軍封帝國主義の

違いがあることを指摘できよう。

一橋にとっては、創立いらい、この権力癒着型資本主義は、あるときは反権力、あるときは反帝大、あるときは妥協ないし屈服といった形態で、たえず問題となっていた。福田のブルジョア改良主義も基本的にはこの体制にむけられていたといっている。すくなくともブルジョア民主主義革命を問題にする以上、権力癒着型資本主義の民主化は基本におかれるべき問題であった。そういう意味で、福田の改良主義路線には、改革路線としては限界があるとはいえ、先駆的な意義を認めることができよう。第二次大戦後、軍封帝主義は崩壊するとはいえ、権力癒着型資本主義のほうは政官財癒着体制としてますます強化されるだけに、そして、現在の経済民主主義路線はこの政官財癒着体制の民主化を一つの基軸においているだけに、そうである。

福田の絶筆となった『厚生経済学研究』（三〇年）では、「経済学は行詰った」として「数理的研究に大なる期待」をよせ（「序」より）、「最後の模索の場」（中山伊知郎「日本における近代経済学の出発点」より）を当時の最も先進的なブルジョア改良主義の厚生経済学に求め

ている。一九二九年世界大恐慌後の三〇年代の資本主義は長期停滞状態に陥り、ここで新古典派が破産するが、この行詰りを明確にとらえているのは福田の慧眼である。福田は、改良主義の見地から多岐にわたる経済的・社会的問題を探究し、その先端的な問題の解明を後継の経済学徒に託しているが、これが次世代の『一橋経済学』として開花していくのである。

六 天皇制ファシズムのもとで苦呻する

『一橋経済学』

三〇年代の危機にたいする対応は、改良主義的余裕をもつ先発帝主義とこの余裕をもたない後発帝主義とでは異なる形態をとった。前者ではイギリスのケインズ経済学やアメリカのニューディールが、後者では凶暴なファシズムが登場する。

このファシズムの時代に、福田が提起し続けてきた数理経済学は、中山伊知郎によって、ローザンヌ学派の立場から、『純粹経済学』（三三年）、『数理経済学研究』（三七年）をとおして確立される。中山は、この数理経済学Ⅱ一般均衡理論に加えて、留学中に師事したオース

トリア学派のシュンペーター、および、危機の三〇年代に新古典派に代わって近代経済学の主流となったケインズ経済学から吸収することによって、中山経済学の体系を『発展過程の均衡分析』(三九年)としてうちだし、一橋における、さらに日本における近代経済学の代表者になっていく。

杉本栄一は、『理論経済学の基本問題』(三九年)において、中山の一般均衡理論に反対して、現実の経済現象を、「たがいに矛盾対立しその矛盾を不断に止揚しつつも、また新たな矛盾をその胎内にはらんでゆく」不均衡過程とみなし、「現実の経済世界を分析すべき理論的武器として極めて生産的なものは、ローザンヌ学派流の一般均衡方程式組織ではなく、クールノー・マーシャルが創始した弾力性概念」であるという。ここでいう矛盾概念はマルクス派のもので、きびしい天皇制ファシズムの条件のもとでも原則をくずしていない態度は敬服に値する。福田いらいの伝統でマーシャルを重視するが、福田がマーシャルの改良主義のなかにマルクスを包摂しようとしたのにならして、杉本はマルクス主義のなかにマーシャルの改良主義を包摂しようとする。この点は、戦後

の『近代経済学の解明』(五〇年)や『近代経済学史』(五三年)ではいっそう明確になる。

杉本の一般均衡理論批判は数学利用の批判ではない。杉本自身は計量経済学を高く評価し、数学利用そのものは重視している。そういう意味で『一橋経済学』には、数学利用を重視するという第四の特色がある。この数学利用については、当時のマルクス主義にはスターリンの偏見により拒否するという誤りがあった。この誤りは戦後の『スターリン批判』のなかで是正されることになるが、一橋出身のマルクス経済学者のなかには、越村信三郎(横浜高商教授)のように、『経済循環の基本図式』(四二年)や『経済循環の価値法則』(四四年)において、数学利用の先駆的な試みを展開している人もいる。

一橋の場合、ファシズム下にあっても、その風にあらわれることなく、『一橋経済学』の伝統に即して前進するという学風をもっていた。中山の『戦争経済の理論』(四一年)は、戦争に対応しようような均衡体系を構築するという迎合的・反動的な提案であるが、しかし、ここでも、「構成体の論理を以てそのまま現代経済の課題を解き得るものとするならば吾々は断乎としてこれに反

对せねばならぬ」とのべている。構成体の論理とはドイツ・ファシズムのイデオロギー的支柱となった立場であるが、中山はファシズムにたいしてははっきりと反対の意志表示をしている。

ここで、筆者の個人的経験についてふれておこう。筆者は学徒出陣組であるが、大学での壮行会の席上で、高島善哉教授は、「君たちは戦争で死んではいけない。かならず生きて帰ってきなさい。戦後の復興の仕事が君たちを待っている」という意味のことをのべられた。ファシズム体制のもとで、このようなことを公言するのはそうとうに勇氣のいることであった。事実、筆者たちは非常に『勇氣』づけられた。この言葉は、軍隊にいるあいだ、ずっと頭のなかにこびりついていた。高島流『一橋リベラリズム』は、いっさいの自由が奪われたきびしい軍隊生活のなかでも生き続けた。この言葉のおかげで戦死せずにすんだと思うほどである。そして戦後、東京の廃墟をまのあたりにしたときに、かさねて、高島教授の言葉の重さを思いださずにはいられなかったのである。

大塚教授も大学にもどり、マルクス経済学の講義が公然と行われるようになった。マルクス経済学も多数輩

出していった。しかし、一橋大学にとつての大きな変化はもっと別のところにあった。軍封帝主義が崩壊し、絶対主義的天皇制が廃止され、日本資本主義が全面的に展開されるようになった。一橋が育成し続けてきたブルジョア経済学・近代経済学が支配階級主流の思想となり、文字どおり、『一橋経済学』はわが世の春を謳歌する全面的な開花期をむかえることになる。だが、この開花期も長くは続かなかつた。一九五〇年代末ごろから一橋の近経は斜陽期にはいったといわれるようになる。だからといって、もとよりマル経が高揚期を迎えているわけではない。この背景にあるものは何か。

筆者自身、すでに学生るときから数えて四〇年以上にわたつて『一橋経済学』のいない手となつてきている。自省の念を含めて、おわりに、『一橋経済学』の問題点を要約しておこう。

おわりに——『一橋経済学』の問題点

① 一橋はなぜ近経の斜陽大学になつたのか。このことは戦後の日本資本主義のあり方と無関係ではない。

戦前いらいの権力癒着型資本主義は、政官財癒着の国

家独占資本主義としてますます強化され、この体制を支える官庁経済学が日本の近代経済学の主流となる。『一橋経済学』の展開過程のなかで日本の近代経済学の代表格となっていた中山伊知郎は、この官庁経済学の代表格ともなり、そのかぎりで、『近経の一橋、マル経の東大』といわれる時代が続くことになる。だが、戦前らしい、東大は官僚に圧倒的に強く、したがって官庁経済学の成立とともに、官庁経済学のメッカは東大が占めるようになり、『マル経の東大』は『近経の東大』に代わっていく。ここに一橋の近経斜陽化の最大の要因がある。もとより、一橋を官僚に強い体質にしたからといって近経に強くなくなるわけではないし、官僚に強い東大の近経が立派な近経であるわけではない。むしろ、現在の日本経済は、七〇年代いらい大変な危機に陥っているが、この危機をつくりだした責任の一半は官庁経済学にもあるわけで、これに強くコミットした『東大近経』の問題点をこそ、検討する必要がある。もとより、近経斜陽化といわれる『一橋経済学』にも問題がなかったわけではない。中山が官庁経済学の代表格であっただけに、この問題は真剣に検討する必要がある。

② 福田いらいの改良主義の伝統を現代の条件のもとで再興するのだからなければならない。

福田の場合、権力癒着型資本主義はブルジョア改良主義的に改造されなければならなかったのであるが、戦後の体制のなかで、部分的に改造された面があることも事実である。しかし、全般的には政官財癒着体制としていっそう強化されてきている。そのことは、福田の改良主義的提起が十分でなかったことをも示しているが、そのことをも含めて、福田の提起を現代的な条件のもとでいっそう拡充する方向で再興していくのでなければならぬ。『一橋経済学』の展開過程のなかで形成されてきた一橋のマルクス経済学は、つねに改良主義をも包摂しようとする総合性をもち続けてきた。かつてマル経では、階級対立をふまえて党派性がとりわけ強調されたことがある。階級対立が激しいかぎり、そのことは現在でも強調されるべきではあるが、階級対立を打開する試みはつねに続けられているわけで、この打開の方向は、反動的なものを批判的に克服しながら、すべてを連帯のもとに総合化することである。『一橋経済学』が作りだした一橋のマルクス経済学にはすぐれた伝統があるわけで、

この伝統を継承・発展させながら、“福田の改良主義”再興の試みは一橋マルクス経済学のなかですで行われつつあるといえるだろう。

③ “一橋経済学”に課せられた最大の問題は、国民の要求にこたえることのできるほんとうの意味での国民的な経済学を構築することである。

日本の経済学は、したがって一橋の経済学は長らく移入学問として展開されてきた。現在もこの傾向から脱却できているということはできない。国民的な経済学の構築はまず移入学問の克服からはじまらなければならない。このことは、もとより“一橋経済学”にとって可能である。百年余にわたって欧米の経済学に精通してきている

ことに加えて、日本資本主義のあり方にたいしてつねに批判的・建設的な見解と提言をもち続けてきている“一橋経済学”であるからこそ、できる問題なのである。いわゆる政官財癒着体制の改良についていえば、この問題について最も多くのことを蓄積してきている大学である。これを国民的な経済学構築の方向にむかっていっそう拡充することによって、“一橋経済学”の展望が開かれることはいうまでもない。この国民的な経済学の構築は、これからの一橋のマルクス経済学にとっても、最大の課題であるということができよう。

(一橋大学教授)